

The Tokyo-Cambridge Gazette

In Search of Japan's Global Strategies

2010年秋から筆者の活動の中心を東京に移した。ケンブリッジの研究者との関係を維持しつつも、米中両国、東南アジア、そして欧州の研究者との関係を強化し、グローバルな視点から読者諸兄姉と共に日本の将来を考えてみたい。従ってタイトルも *Tokyo-Cambridge Gazette* に変更する。

『東京=ケンブリッジ・ガゼット：グローバル戦略編』 第185号 (2024年9月)

キャンニングローバル戦略研究所 研究主幹 栗原 潤

彼れを知りて己れを知れば、百戦して殆(あや)うからず。
彼れを知らずして己れを知れば、一勝一負す。
彼れを知らず己れを知らざれば、戦う毎に必ず殆(あや)うし。

Know the enemy and know yourself; In a hundred battles you will never be in peril.
When you are ignorant of the enemy but know yourself; Your chances of winning or losing are equal.
If ignorant both of your enemy and of yourself; You are certain in every battle to be in peril. (Sunzi/Sun Tzu)

小誌は大量の資料を網羅的かつ詳細に報告するものではない—筆者が接した情報や文献を①マクロ経済、②資源・エネルギー、環境、③外交・安全保障の分野に関し整理したものである。紙面や時間の制約に加えて筆者の限られた能力という問題は有るが、小誌が少しでも役立つことを心から願っている。

今月号 «目次»

1. *Tokyo-Cambridge Gazette*: グローバル戦略編第185号
2. 情報概観—①マクロ経済、②資源・エネルギー環境、③外交・安全保障
3. 編集後記

1. *Tokyo-Cambridge Gazette*: グローバル戦略編第185号

先端技術開発を巡る欧米・中国間の競争に関して、友人達と情報交換を行う毎日だ。

7月初旬に上海で開催された世界人工知能大会(WAIC)や8月下旬に北京で開催された世界ロボット大会に関する情報交換を毎日行っている。本来なら訪中して情報収集を直接行わなくてはならない。だが、ビザ等の渡航手続きの問題、そして現地で行動を制約される事に対する不安があり、二次情報や友人達からの連絡という形の情報収集・分析しか出来ない状況だ。制約された形で収集した情報の中から判断出来る事は、AIやrobot、またchipやbio等の中国先端技術開発が同国のマクロ経済の状態とは異なり「熱気」に溢れている点だ。だが、この状態が何時まで続くのか、如何なる成果を生むのか、また如何なる形で国際関係に影響を与えるのか。これらの点に関して引き続き注視する必要がある。

中国の技術開発に関して、過去の小誌の中で触れた Harvard 大学の雷雅雯教授の本や北京出身だが、学部学生から博士号取得まで Harvard で一貫して学び、完璧な英語を話す金刻羽 LSE 教授の本等を基に議論した。両書は中国の熱気溢れる「追い抜き(弯道超车)」戦略に関し皮相的な観察を避け個別事例を基に判断すべき」と述べている(前者の本が *The Gilded Cage: Technology, Government, and State Capitalism in China* /「鍍金の笼子: 中国的技术国家资本主义」で後者の本が *The New China Playbook: Beyond Socialism and Capitalism* /「新中国策略: 超越社会主义和资本主义」)。

欧州では8月20日、TSMCの工場建設がドレスデンで開始された。式典には魏哲家会長と並んでフォン・デア・ライエン欧州委員会委員長やシュルツ首相が出席し、「シリコンで栄えるザクセン州(Silicon Saxony)の門出を祝った。「半導体は21世紀の燃料(Halbleiter sind der Treibstoff des 21. Jahrhunderts)」と題した演説の中でシュルツ首相が語った言葉に接し「国が企業を育てる」だけでなく「企業が国を選ぶ」という時代に生きている事を実感している—彼の言葉とは、「TSMC、ようこそ! なかでも(工場立地に関して)、我が国を選んで頂き喜んでます(Herzlich willkommen, TSMC! Wir freuen uns ganz besonders darüber, dass Sie sich für unser Land entschieden haben.)」だ(PDF版の2参照)。だが、ドイツ工場の成否について、今後も見続ける必要がある。何故ならば東洋と西洋とでは「働き方」や「職業観」が異なるからだ。これに関連して TSMC の人財開発担当の何麗梅(Lora Ho)氏が今年の春に「台湾以外の海外で優れた人財を確保する事が難しい」と語った事を思い出している。

7月29日、イタリアのメローニ首相は北京で講演を行った(演題は「知的旅路: マルコ・ポーロの旅と東西世界の遺産(Viaggio di Coscenze. Il Milione di Marco Polo e la sua eredità tra Oriente e Occidente /「传奇之旅: 马可·波罗与丝绸之路上的世界」)」。2024年は伊中間戦略 partnership 結成20周年を祝い、またマルコ・ポーロ没後700周年を祝う年だと首相は最初に述べた。そして貿易・直接投資に関する伊中間インバランス解消に向けて、両国が「公正・透明・互恵的に協力(collaborare in modo leale, trasparente e reciprocamente vantaggioso)」する重要性を語った。友人達に「首相は Marco Polo に言及しただけで、彼はモンゴル帝国のクビライの下で働いたんだよね。もしもボクが中国側の人間だったら、別の事例、例えば、ローマ帝国のマルクス・アウレリウス皇帝が後漢の桓帝へ使者を遣わした事に触れてもらいたかったなあ」と語った次第だ。

この夏、日本を訪れた中国の友人達と久しぶりに語り合う事が出来て喜んでいる。

8月上旬、中国の友人達が東京を訪れ、彼等と知的会話を楽しんだ。上海の門漢華同済大学教授からは立派な書籍(庭園専門家の陳從周先生の《説園(On Chinese Garden)》)を頂いて感激している。そしてコロナ禍以前に上海で彼と北宋の政治家、范仲淹の人生について語り合った事を思い出していた。また Harvard 時代からの友人である干鉄軍北京大学教授からは、所長を務める国際関係学院(IIS)の最新資料を頂いた。彼が「ジュン、早く北京に戻って来なよ」と言った。だが、筆者は「visa等があって厄介だし…」と言葉を濁していた。これに関連して、8月22日の中国外交部の毛寧報道官による記者会見が、筆者をなお一層不安にさせている。『読売新聞』の質問に対して、彼女は「日本には中国の法規遵守に関して国民を教育・指導してもらいたい(希望日方教育、引导本国公民遵守中国的法律法规)」と答えている。中国の法規に関する筆者の貧弱な知識では、いかなる形で法に触れるか分からない。やはり訪中は今出来ないと考え、当面は中国語の学習だけに止めておくつもりだ。

6月の訪独の際、知人と語り合った本(Daniel Hedinger, *Die Achse: Berlin-Rom-Tokio 1919-1946*, 2021)を、今再読している。

訪問先の Düsseldorf はドイツの中で日本人が最も多く住んでいる街だ。そのためか日本に詳しいドイツ人もいて驚いた。会議の後に訪れたバブ(Zum Schlüssel)で、独日関係の歴史に詳しい人が筆者に質問した—「あなたは *Die Achse* を読みましたか?」、と。筆者は「ええ読みました。全部ではありませんが…」と答え、「本の中には初めて見る写真も多く、しかも subtitle の(Berlin-Rom-Tokio: 為政的ですね)と付け加えた。」

『Berlin-Rom-Tokio』は三国同盟を画策したリッペントロップ外相が創刊した propaganda 雑誌のタイトルだ。そして *Die Achse* を邦訳すれば、「ザ・枢軸」となる。「枢軸」という言葉はムッソリーニの演説に由来している—1936年、伊独両国は「全欧州諸国が協力する際、必要になる軸(un asse attorno al quale possono collaborare tutti gli Stati europei)」と彼は語った。即ち「枢軸」は「欧州」が起源なのだ。1933年秋に国際連盟を脱退したドイツは1934年から「宿敵」ソ連を念頭に日本に関心を持ち始めた。そして1935年の独英海軍協定以降、独英関係の強化に失敗した結果として対日関係を重視し始めたのだ。だが、そうした状況にあっても、当時の「非アーリア人」に対する差別は厳しく、1935年2月の独政府の或る指示書には、「日本人を劣等民族としてだけは表さないように(die Japaner nicht einfach als eine minderwertige Rasse bezeichnen)」という文章が付いていたのだ。また大阪大学の中村綾乃准教授の研究に依れば、「日本人とアーリア人との結婚」は望ましくないとし、法的に認められなかった。筆者が残念に思った事は、Maestro フルトヴェングラーが或る友人に宛てた手紙の中で、「今日、パレストリーナ、ベートーヴェン、シェーンベルクと、日本の音楽が同じだと思う(für den heute Bedeustrn, Beethoven, Schönberg und japanische Musik dasselbe bedeuten)」ような人々を軽蔑していた事だ(今では、或る意味で Maestro の考えは誤りだと分かるが…)。

いずれにせよ同書(*Die Achse*)に依れば、ドイツの「電撃戦(Blitzkrieg)」・「電撃外交(Blitzdiplomatie)」に目が眩み、「バスに乗り遅れるな」として、Hitlerite Germany の propaganda にまんまと騙されたのが当時の大日本帝国だったのだ。ドイツの陸軍や外務省の幹部からは蔑視され、信頼したはずのリッペントロップ外相からも本心を明かされず、自分のドイツ語に陶醉していた大島浩駐独日本大使。そして当時の欧州を知る優れた日本人の言葉に耳を傾けず、外交官らしくない英語を話す松岡外相の責任は重い。1941年4月、松岡外相がスターリンと結んだ日ソ中立条約を知ったゲッベルス国民啓蒙・宣伝相が、「名譽アーリア人(Ehrenarier)の日本人と“非アーリア人(Nichtarier)”のロシア人との間柄に関し、日記に残した文章は印象的だ—「それは純粋アジアの友人関係だったからだろう(Das scheint ja eine richtige asiatische Verbrüderung gewesen zu sein)」。恥づかしながらも筆者も Harvard でドイツの友人達と共に歴史を調べるまでは Nazi propaganda に洗脳されていた。そして在日ドイツ人翻訳家のマライ・メントライン氏が、*Newsweek* 誌の日本語版に載せた記事を思い出している。曰く:「よく年配の日本人から『ドイツと日本は第2次大戦の「戦友」ですけれど』『次回はイタリア抜きで!』など、自信満々の『ドイツ愛』アピールを頂く。昭和的な好意の表れではあるが困る。なぜなら、それは彼らの(筆者註: 戦前昭和的な)『脳内ドイツ』イメージに基づく好意だからだ」(*Newsweek* 誌日本語版、2020年10月30日)。

The Tokyo-Cambridge Gazette (In Search of Japan's Global Strategies)

No. 185 (September 2024)

歴史に関する知識は、成熟した文明を維持し継続するための第一級の技術である…今日の“教養ある”人達は、信じられないほどの歴史的無知を患っている。
(ホセ・オルテガ・イ・ガセット)

Historical knowledge is a technique of the first order to preserve and continue a civilisation already advanced. . . . The most “cultured” people to-day are suffering from incredible ignorance of history.
[El saber histórico es una técnica de primer orden para conservar y continuar una civilización proyecta. . . . Las gentes más ‘cultas’ de hoy padecen una ignorancia histórica increíble.]

. . . The most “cultured” people to-day are suffering from incredible ignorance of history.
[José Ortega y Gasset]

2. 情報概観 紙面の制約上、原則、参考になると筆者が判断した最新情報のみを掲載し解説や関連資料は一切省略。

マクロ経済: Macroeconomics—Books, Papers, and Articles

Bloomberg, 2024, “Xi Cements Role as ‘Chief Economist,’ Shrinking Space for Debate,” July 23.

Eklou, Kodjovi M. *et al.*, 2024, “Spillovers from China’s Growth Slowdown to the Singapore Economy: Singapore,” Selected Issues Paper No. 2024/041, Washington, D.C.: International Monetary Fund (IMF), August.

Klein, Caroline and Jonathan Smith, 2024, “Addressing Labour and Skills Shortages in a Fast-Changing Economy,” Economics Department Working Paper No. 1811, Paris: Organisation for Economic Co-operation and Development (OECD), August.

Nauro, Campos, F. *et al.*, 2024, “Okun in the Euro: New Evidence from Structural Okun Law’s Estimates for the Euro Area, 1979-2019,” Working Paper No. 24/172, Washington, D.C.: International Monetary Fund (IMF), August.

マクロ経済: Macroeconomics—Conferences, Workshops and Seminars

August 22–24: (Jackson Hole, WY), Federal Reserve Bank of Kansas City: “Jackson Hole Economic Policy Symposium: Reassessing the Effectiveness and Transmission of Monetary Policy.”

資源・エネルギー、環境: Resources, Energy, and Environment—Books, Papers, and Articles

Ansari, Dawud *et al.*, 2024, „Die aufkommende Geopolitik von Carbon Capture & Storage (CCS) in Asien [Towards a Geopolitics of Carbon Capture & Storage (CCS) in Asia]“, SWP-Aktuell 2024/A 41, Berlin: Stiftung Wissenschaft und Politik (SWP), August.

Böttcher, Miranda *et al.*, 2024, “Foresight: Multilevel Climate Policy in 2030,” Research Division EU, Working Paper No. 2, Berlin: Stiftung Wissenschaft und Politik (SWP), August.

Teusch, Jonas *et al.*, 2024, “Carbon Prices, Emissions and International Trade in sectors at Risk of Carbon Leakage: Evidence from 140 Countries,” Economics Department Working Paper No. 1813, Paris: Organisation for Economic Co-operation and Development (OECD), July.

資源・エネルギー、環境: Resources, Energy, and Environment—Conferences, Workshops and Seminars

July 27: (a hybrid event, Brussels) Bruegel: “Re-energising Europe’s Global Green Reach.”

外交・安全保障: Diplomacy and National Security—Books, Papers, and Articles

Blinken, Antony, Lloyd Austin and Jake Sullivan, 2024, “Biden’s Indo-Pacific Diplomacy Has Made America’s Future More Secure,” *Washington Post*, August 5.

Bloomberg (Timothy L. O’Brien, Timothy L.), 2024, “Believe Trump When He Says He Won’t Give Up Power,” July 29.

Bloomberg (Jamie Tarabay and Chris Strohm), 2024, “Russia, Iran, China Seek to Shape US Election, Officials Say,” July 29.

Bruun, Laura, 2024, “Towards a Two-Tiered Approach to Regulation of Autonomous Weapon Systems: Identifying Pathways and Possible Elements,” Solna: Stockholm International Peace Research Institute (SIPRI), August.

Charap, Samuel and Krystyna Holynska, 2024, “Russia’s War Aims in Ukraine: Objective-Setting and the Kremlin’s Use of Force Abroad,” Santa Monica, CA: RAND Corporation, August.

Cox, Joseph, 2024, *Dirk Wire: The Incredible True Story of the Largest Sting Operation Ever*, New York: PublicAffairs, June.

Defense News (Jen Judson), 2024, “DOD Event Challenges Industry to Down Largest Drone Swarms to Date,” July 26.

Defense News (Noah Robertson), 2024, “US to Revamp Its Command in Japan amid Renaissance in Defense Ties,” July 28.

Deutsche Welle (DW), 2024, „Deutschland und Philippinen streben Militärkooperation an“, August 4.

Economist, 2024, “America Recreates a Warfighting Command in Japan,” July 27.

Edel, Charles and Christopher Johnstone, eds., “U.S.-Australia-Japan Trilateral Cooperation on Strategic Stability in the Taiwan Strait,” Washington, D.C.: Center for Strategic and International Studies (CSIS), August.

Finnish Government, Ministry of Defence (Puolustusministeriö), 2024, “Suspected Territorial Waters Violation in the Eastern Gulf of Finland (Epäilty aluevesiloukkaus itäisellä Suomenlahdella),” Helsinki, July 26.

Frankfurter Allgemeine Zeitung (Reinhard Vesper), 2024, „Der Aggressor ist verwundbar“, August 9.

Mead, Walter Russell, 2024, “The Return of Hamiltonian Statecraft: A Grand Strategy for a Turbulent World,” *Foreign Affairs*, Vol. 103, No. 5 (September/October), pp. 52-66.

Naval Times (Yoshihiro Inaba (稲葉義泰)), 2024, “Italy’s Aircraft Carrier Cavour Is in Japan to Conduct Joint Exercises with JMSDF,” August 24.

Navy Times (Geoff Ziezulewicz), 2024, “Aircraft Carrier Bush Gets First-Ever Stingray Drone Control Room,” August 21.

Reuters (Francesco Guarascio and Khanh Vu), 2024, “EU’s Borrell Offers Vietnam Security Support on South China Sea,” July 30.

Rice, Condoleezza, 2024, “The Perils of Isolationism: The World Still Needs America—and America Still Needs the World,” *Foreign Affairs*, Vol. 103, No. 5 (September/October), pp. 8-25.

Tagesschau (Ingo Wagner und Svenja Smolarek), 2024, „Sicherheitsstufe auf NATO-Stützpunkt wieder gesenkt“, August 23.

Wall Street Journal (Heather Somerville), 2024, “Why First Responders Don’t Want the U.S. to Ban Chinese Drones [为何美国搜救人员不希望中国无人机被禁?],” August 8.

Wall Street Journal (Thomas Grove), 2024, “How a General’s Blunder Left Russia’s Border Vulnerable,” August 21.

Washington Post (Jeff Stein and Federica Cocco), 2024, “The Money War: How Four U.S. Presidents Unleashed Economic Warfare across the Globe,” July 25.

Washington Post (Hannah Knowles), 2024, “A ‘Weird Roller Coaster Ride’: Trump vs. Harris and America’s Surreal Summer,” July 29.

外交・安全保障: Diplomacy and National Security—Conferences, Workshops and Seminars

July 26: (an online event, Washington, D.C.) Brookings Institution: “How Strong Is China’s Navy?”

August 8: (an online event, Washington, D.C.) Center for Strategic and International Studies (CSIS): “U.S. Investments in Asia: Catalyzing Sustainable Growth through Strategic Partnerships.”

August 21: (an online event, Washington, D.C.) Center for a New American Security (CNAS): “AI and the Evolution of Biological National Security Risks.”

それぞれの近代産業国家の国内での階級的対立の先鋭化は、次第に国民的統合を破壊し始め、国際的友好関係をも危うくしつつある。経済的不平等と社会的不正義が継続的に拡大しているが故に、諸国は最終的な対立へと追い込まれ、各自破壊に
The sharpening of class antagonisms within each modern industrial nation is increasingly destroying national unity and imperiling international comity as well. It may be that the constant growth of economic inequality and social injustice in our industrial civilization will force the nations into a final conflict, which is bound to end in their destruction. (Reinhold Niebuhr)

その他—Information in Other Fields

Acosta, Joie D. et al., 2024, "Centering Equity in the Implementation of Emerging Digital Health Technologies," Santa Monica, CA: RAND Corporation, August.

Bertelsmann Stiftung, 2024, "Financing SME Growth in Germany," SME and Entrepreneurship Paper No. 61, Paris: Organisation for Economic Co-operation and Development (OECD), August.

Bloomberg, 2024, "US CEOs Get Warm Welcome in China, But Unsure If They Are Wanted," July 25.

Bloomberg (Shuli Ren), 2024, "Big Luxury Frets That China Is Turning Japanese," July 29.

Bloomberg, 2024, "China to Stop Publishing Daily Global Stock Flows in Mid-August," July 29.

Bloomberg (Alan Crawford), 2024, "World's Top Auto Chipmakers Deepen Their Embrace of China," August 9.

Bloomberg, 2024, "Foreign Investors Pull Record Amount of Money from China," August 12.

British Broadcasting Corporation (BBC), 2024, "HARDTalk: Taro Kono [河野太郎] – Minister for Digital Transformation, Japan," July 25.

Cable News Network (CNN) (Amy Gunia and Alkira Reinfrank), 2024, "Meet 'Eve' the DNA-Collecting Robot Fish," August 11.

Doshi, Anil R. and Oliver P. Hauser, 2024, "Generative AI Enhances Individual Creativity but Reduces the Collective Diversity of Novel Content," *Science Advances*, Vol. 10, No. 28 (July 12).

Economist, 2024, "The Nationalism of Ideas," July 25.

Economist, 2024, "The War on Tourism Is Often Self-Harming," July 29.

Financial Times (Kathrin Hille), 2024, "Chinese Emigration to Malaysia Doubles on Student and Investment Surge," August 5.

Garcia-Macia, Daniel and Alexandre Sollaci, 2024, "Industrial Policies for Innovation: A Cost-Benefit Framework," Working Paper No. 24/176, Washington, D.C.: International Monetary Fund (IMF), August.

German Government (Bundesregierung), 2024, „Rede von Kanzler Scholz beim Spatenstich zur TSMC-Halbleiterfabrik: ‚Halbleiter sind der Treibstoff des 21. Jahrhunderts‘“, Berlin, August 20.

Kahn, Jeremy, 2024, *Mastering AI: A Survival Guide to Our Superpowered Future*, New York: Simon & Schuster, July.

Lawrence, Robert Z., 2024, *Behind the Curve: Can Manufacturing Still Provide Inclusive Growth?* Washington, D.C.: Peterson Institute for International Economics (PIIE), August.

Lin, Chia-Hsi Jessica et al., 2024, "Gathering Geopolitical Storms — Can Technology Help Save the World Order? Insights from a Tabletop Exercise at the 2024 Munich Security Conference," Santa Monica, CA: RAND Corporation, August.

MIT Technology Review (Antonio Regalado), 2024, "Controversial CRISPR Scientist Promises 'No More Gene-Edited Babies' until Society Comes Around," July 26.

Reuters, 2024, "Court Upholds 99-year-old Nazi Camp Worker's Murder Conviction," August 20.

Ryseff, James et al., 2024, "The Root Causes of Failure for Artificial Intelligence Projects and How They Can Succeed: Avoiding the Anti-Patterns of AI," Santa Monica, CA: RAND Corporation, August.

Shar, Raj M. and Christopher Kirchoff, 2024, *Unit X: How the Pentagon and Silicon Valley Are Transforming the Future of War*, New York: Scribner, July.

Shumailov, Iliia et al., 2024, "AI Models Collapse When Trained on Recursively Generated Data," *Nature*, July 24.

United States Government, Treasury Department, Committee on Foreign Investment in the United States (CFIUS), "Annual Report to Congress," Washington, D.C., July.

Varsik, Samo and Lydia Vosberg, 2024, "The Potential Impact of Artificial Intelligence on Equity and Inclusion in Education," Artificial Intelligence Paper No. 23, Paris: Organisation for Economic Co-operation and Development (OECD), August.

Vazquez-Venegas, Pedro Isaac et al., 2024, "Digital and Innovative Tools for Better Health and Productivity at the Workplace," Health Working Paper No. 169, Paris: Organisation for Economic Co-operation and Development (OECD), August.

Vermeer, Michael J. D., 2024, "Historical Analogues That Can Inform AI Governance," Santa Monica, CA: RAND Corporation, August.

Wall Street Journal (Stu Woo), 2024, "China Is Getting Secretive about Its Supercomputers [中国超级计算机正成为不可泄露的'天机']," July 23.

Wall Street Journal (Julie Steinberg and Scott Patterson), 2024, "The Silicon Valley Startup Using AI to Scour the Earth for Copper and Lithium," July 28.

Wall Street Journal (Jason Douglas and Clarence Leong), 2024, "The U.S. Has Been Spending Billions to Revive Manufacturing. But China Is in Another League," August 3.

Wall Street Journal (Mike Colias and Christopher Ottis), 2024, "Auto Industry's EV Retreat Hastens," August 22.

Event: July 31: (an online event, Washington, D.C.) Center for Strategic and International Studies (CSIS): "The U.S. Vision for AI Safety: A Conversation with Elizabeth Kelly, Director of the U.S. AI Safety Institute."

Event: August 21~25: (Beijing) Chinese Institute of Electronics (CIE) (中国电子学会): "Shijie Jiqiren Dahui [World Robot Conference/世界机器人大会]: 'Gòng Yù Xīnzhǐ Shēngchǎn lì Gòngxiǎng Zhìnéng Xīnwèilái [Co-Fostering New Quality Production Forces for a Shared Intelligent Future/共育新质生产力 共享智能新未来].'"

3. 編集後記

上述した三国同盟の本(Die Achse)を巡る会話は今も続いている。

以前から小誌で典型的な“同床異夢”の関係であった三国同盟を記録した書籍に触れてきた。そして今再び Anglo-American liberal world order が、China-Russian Axis から挑戦を受けている。こうした中、過去と現在を比較しつつ非戦・平和への道を考える上で、この Die Achse は丁度良い本だ。こうした理由から同書が優れた翻訳家によって邦訳され、多くの日本人が当時の日独関係を正確に検証する事を願っている。

海外資料に関して筆者は常日頃から「少・遅・誤」或いは「誤・少・遅」と呼ぶ事態を懸念している。即ち海外資料の中で、「翻訳されるものが少なく、翻訳されるタイミングが遅く、翻訳されても誤りが多い」という厳しい現状がある。例えば、2023年2月、米国で発売された *Four Battlegrounds* の素晴らしい邦訳(『AI覇権 4つの戦場』)が発売されたのは今年の5月。発表から1年以上経過している。即ち世界の専門家の間では或る意味で既に“古典的名著”になりつつある書物だ。因みに小誌では2023年4月(No. 168)と今年1月(No. 177)で同書に触れた。従って globalization が一段と複雑に深化する現在、国際的な討論の場では、邦訳を伴う情報伝達過程において“時差”は“不可避”ではあるが、“致命的”になりかねない。

それだからこそ、優秀な翻訳家と出版社が最新の AI 等を活用し翻訳上の“時差”を短縮し、「少・遅・誤」現象が減退する事を期待している。

さて、ドイツの知人からの質問で興味深かったのは、「日本で三国同盟に疑念を抱いた人はいなかったのか?」だった。筆者は「勿論いたよ。国際感覚に優れた駐独海軍士官の横井忠雄大佐は、リップントロップ外相から *persona non grata* とされたため更迭されたし、哲学者の西田幾多郎先生も日本に居たとは言え、ナチ化するドイツに批判的だった。優れた哲学者の洞察力は凄いな。でも彼等は少数派だったのさ」と答えた次第だ。

今後とも小誌を通じ、海外情報が日本に届く“時差”を出来るだけ短縮してゆきたいと考えている。 以上

(編集責任者) 栗原 潤	Jun KURIHARA
キャンニングローバル戦略研究所 研究主幹	Research Director, Canon Institute for Global Studies
〒100-6511 東京都千代田区丸の内 1-5-1 新丸の内ビルディング 11 階 Tel: +81-(0)3-6213-0550 (代)	Kurihara.Jun@gmail.com
過去の Cambridge Gazette はネット上で見ることが出来、ダウンロードも出来ます。ネット上でキャンニングローバル戦略研究所のウェブサイトに行き、そこで栗原のコラム・論文の欄をクリックして頂ければ、バックナンバー全てを見ることが出来ます。	